備える 3.11から　第198回 若手記者が見た被災地

伝える 誓い新た

東日本大震災から十一年が過ぎ、あの日の記憶と教訓をどう伝えていくのかが問われている。震災後に入社した二十～三十代の記者四人が初めて被災地を取材した。現場を歩き、どう感じたのか。

津波の傷痕を心に刻む
四日市支局・神尾大樹（26）

岩手県大槌町安渡（あんど）地区の沿岸部は、海が見えないほどの巨大な防潮堤が造られていた。陸側では、盛り土された土地に新しい家々が並んでいる。「この一帯が全部、津波で流されたのか」と思うと、胸が締め付けられた。

安渡地区では人口の一割を超える二百十七人が命を落とした。消防団員の鈴木亨（とおる）さん（五二）は堤防の水門を閉めた後、あふれた川の水から消防車で何とか逃げた。「あと五秒遅かったらだめだった」と振り返った。

震災から数日は消防車で寝泊まり。仮設住宅に四カ月、災害公営住宅に二カ所で計八年住んだ。転職も二回経験した。「震災でいろんなものが狂ってしまった。町の復興は終わったかもしれねえが、おれらの心の復興は全然まだだ」と話した。

記者が勤務する三重県では、南海トラフ地震が起きると、大槌町と同じように浸水すると予測されている自治体がある。「どれだけ整備しても自然にはかなわない。津波が来たらとにかく逃げるしかない」と鈴木さん。その言葉の重みを伝えていきたい。

まだ戻れぬ住民に思い
高山支局・八重樫智（30）

「ゼロ人です」。福島県いわき市にある双葉町役場で、町内の居住者数を職員に聞いた時の答えだ。原発事故の影響によって「まだ誰も住めない町がある」ということをあらためて実感した。何も分かっていない自分を恥じた。

北海道で胆振（いぶり）東部地震が起きた二〇一八年、道内で新聞記者をしていた。道内全体が停電し、水道も一週間ほど使えず大変だった。「被災」の意味を多少は分かっていたが、福島はまた違う。原発事故の終着点は十一年たっても見えない。

双葉町では今も全住民が避難を続ける。故郷に戻れないまま亡くなった人もいるだろう。双葉だけでなく計七市町村の一部で放射線量は年五〇ミリシーベルトを超え、立ち入りが制限される帰還困難区域が広がる。大熊町の区域内の取材では、窓ガラスが割れたままの商店や住宅に心が痛んだ。住民は生活を奪われたままだった。

区域が解除された地域で、帰還した住民を支援する楢葉町の男性（四六）は「地元でも（震災の）記憶が風化している」と言う。こうした場所があることを、伝え続けなければと思った。

人けがなく荒れ果てた様子の帰還困難区域内の住宅＝福島県大熊町で

再建した町の声を追う
松阪支局・清水悠莉子（26）

津波被害を受けた宮城県女川町では震災後、高台（手前）に住宅地が、海側に人が住まない商業地が造成された＝２月28日

有名な建築家が設計した駅舎に、赤れんがの歩道と統一感がある黒い屋根の店。津波で町の九割が被害を受けた宮城県女川町で高台に上ると、再建された美しい姿が一望できた。一瞬、被災地にいることも忘れた。

新築の自宅に案内してくれた平塚航也さん（三〇）は、昔から住んでいた家が津波で骨組みだけになった。仮設住宅に住み、二カ月かけて修繕した。ところがその後、自宅周辺は災害危険区域に指定され、住居の建築が禁止となり解体された。「たった二時間で壊された。あっという間だったね」

家を二度も失ったことに「つらくなかったですか」と聞くと「まあ仕方ないし、そんなもんだな」。声色は明るかったが、表情は引きつっているように見えた。記者が二十年近く住んだ岐阜県の実家は、今も変わらず同じ場所にある。同年代なのに全く違う境遇。何だか申し訳なくなった。

復興が進むのは喜ばしいが、きれいな町並みからは震災当時の様子も見えにくくなってきた。十人十色の経験や声を残していかなければ、と改めて思った。

若い世代に教訓つなぐ
長野支局・城石愛麻（29）

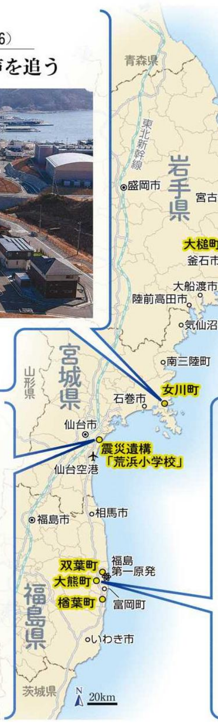
仙台市若林区の震災遺構「荒浜小学校」では、住宅や松林が再現されたジオラマに、住民らの思い出が記されていた。「部活帰りに海を見に来た」「海辺でデートした」。荒浜地区は津波などで百八十人が犠牲になった。何げない日常を奪った震災を一層、憎らしく感じた。

いまは人が住めない災害危険区域になっている。元校長の川村孝男さん（六七）は「町があったことすら知らない人もいる。災害を自分ごとと思ってほしい」と危機感を話した。

記者が勤務する長野市では、二〇一九年の台風19号で千曲川（ちくまがわ）沿いが洪水被害を受けた。しかし、被害があった地域以外ではなかなか備えが進まない。「自分ごと」として教訓を生かす難しさは震災の被災地と同じだ。

荒浜小では、修学旅行で訪れた札幌市の女子中学生がジオラマに見入っていた。「ここに来て良かった。両親に荒浜のことを話して絶対に忘れないようにしたい」。若い世代が高い意識を持つためにも、被災地の姿を伝え続ける意味は大きいと感じた。

震災以前の旧荒浜小周辺の町並み模型。住民らが板に思い出を書き、今も少しずつ増えている＝仙台市若林区の震災遺構・荒浜小で



災とSeeing さいとシーイング

ハザードマップでリスク確認を

▼13▲ 液状化（三重県桑名市、愛知県愛西市）

東日本大震災で家屋やライフラインに影響を与えた液状化現象は、東海地方でも起きたことがある。名古屋大の野田利弘教授（地盤工学）は「濃尾平野は日本最大級の海抜ゼロメートル地帯があり、液状化のリスクは高い」と語る。

液状化は、緩く堆積した砂などの地盤が、強い地震の揺れによって液体状になる現象だ。地面から泥水が噴き出したり、地盤沈下を起こしたりする。東海地方では一九四四年の昭和東南海地震で起きた。

三重県桑名市の丹羽量平さん（八六）は小学三年の時、長島村国民学校（現長島中部小）で液状化を目の当たりにした。大きな揺れで運動場に逃げると地割れが起きた。「地面がパクパクと開いたり閉じたりして砂がぶわっと噴き出てきた」。辺りは砂浜のようになったという。

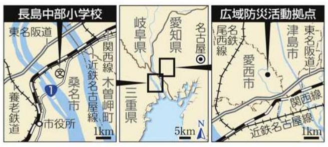
別の場所にいた同市の平野安興（やすおき）さん（八四）も「泥水が噴き出して辺りはベタベタ。家も傾いた」と振り返る。野田教授によると、液状化は一八九一年の濃尾地震でも起きた。

東日本大震災では、千葉県浦安市などで液状化により道路や上下水道、家屋に大きな被害が出た。内閣府の二〇一二年の想定によると、南海トラフ地震では液状化で全壊する棟数は愛知県で二万三千、三重県で六千五百、岐阜県で三千八百、静岡県で四千八百に上るとされる。

愛知県は海抜ゼロメートル地帯で広域防災活動拠点の整備を進める。本年度中に完成予定の愛西市の拠点は、ヘリコプターの離着陸場やボートの船着き場を備え、津波や液状化で浸水した地域から逃げ遅れた人を救う。拠点は三メートルほど盛り土し、液状化を防ぐために地盤を締め固める。

各自治体は液状化のリスクをハザードマップで公開している。野田教授は「まず自分の住んでいる地域が液状化しやすいのか確認してほしい」と指摘。地盤改良に費用がかかる点が課題となっている。

（横井武昭）



昭和東南海地震での液状化の被害について話す丹羽量平さん㊧と野田利弘教授＝三重県桑名市の長島中部小学校前で

CBCテレビによる動画はこちら

サバイバルキャンプ 来たれボランティア

中日新聞社は、10月に開かれる「備える！中日サバイバルキャンプ」の企画・運営を手伝う学生ボランティアを募集している。

対象は愛知、岐阜、三重県内の大学生と高校生。５月から毎月１回程度、中日新聞本社（名古屋市）などで開かれる事前講座で防災知識を身につけ、スタッフとして運営に協力する。交通費支給。キャンプは愛知県内で開催し、１泊２日で楽しみながら防災を学ぶ。

同キャンプのホームページから申し込む。問い合わせは中日新聞社事業局＝電052（221）0726（平日午前10時～午後６時）＝へ。

次回の「備える」は五月二日に掲載する予定です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています